世界のオペラ歌手に聞く ③

ファビオ・サルトーリ（T）

細部まで勉強を重ねたオテロを歌うのが夢です

取材・文＝中 東生
Text=Shinobu Naka

Interview with Fabio Sartori

9月のミラノ・スカラ座来日公演、プッチーニ《トスカ》では、イタリアの伝統に沿って熟成したファビオ・サルトーリの声が聴けるはずであった。「純イタリアふうオテロ」が誕生する役デビュー前に、美声の軌跡を辿ってみたい。

モナコの声に誘われて……

「僕の出身地であるトレヴィーゾには、マリオ・デル・モナコ邸（ランチェニーゴのルイーザ邸）がありました。週末にその側に住む叔母を訪ねると、発声練習をしている彼の声がよく聴こえ、その声に恋して、オペラ歌手への道を歩み始めたのです。まずは教会の合唱団に入りました。そこの先生に紹介され、父や姉の車で毎週土曜日個人レッスンに通いました。その後ボローニャのコレオーネ・マジェーラ先生に師事して、ティート・スキーパ国際声楽コンクールで第2位になり、ミラノでフランコ・コレッリからも学びました。叔父は結婚式などで歌っているテノール歌手だったので、学費の足しに、僕もベネトンの息子の結婚式などで歌いました。ヴェネツィアの音楽院に入り、フェニーチェ劇場の合唱団員として端役も歌い、そこでのコンクールを通してプッチーニ《ボエーム》でデビューするチャンスを得たのです。ちょうど同じ20歳のころ、マジェーラ先生がルチアーノ・パヴァロッティ国際声楽コンクールに連れて行ってくれました。するとパヴァロッティは『ファビオ、おめでとう、とてもすばらしい！ フィラデルフィア本選に直接出られるようにしよう』と推してくれました。でも、フェニーチェ劇場でロドルフォを歌ってデビューするほうを選んだため、本選は諦めざるを得ませんでした」

モナコの声を聴いてオペラの道を志したというサルトーリ

ジャイオッティから助言

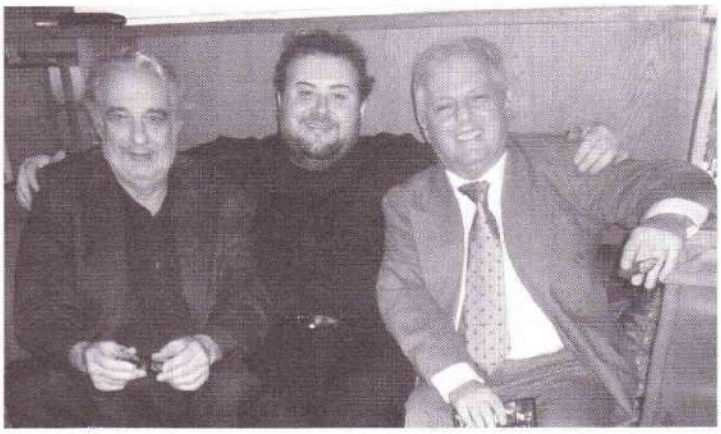
「その後、ウィーン国立歌劇場でドニゼッティ《シャモニーのリンダ》をエディタ・グルベローヴァと歌いました。ここのヴェルディ《シモン・ボッカネグラ》も思い出深いです。グルベローヴァとはベルリン州立歌劇場のベッリーニ《ノルマ》でも共演しました。そして最近まではバス歌手のボナルド・ジャイオッティにずっと助言をもらっていました。彼は僕の声を共鳴させる空間を広げてくれたのです！ 彼の死後は、彼のレッスンでピアノを弾いていた韓国人ピアニストと、彼のテクニックに沿って勉強を続けています。このインタヴューのあとも、ヴェルディ『レクイエム』を練習する予

Column④

定です。新型コロナウイルスの感染拡大が収まれば、9月にミラノのドゥオーモでリッカルド・シャイーの指揮の下、この『レクイエム』を歌う予定だからです。その前にはアレーナ・ディ・ヴェローナ音楽祭で7月25日、特別コンサートにも出演します。平土間の中心のみを使って、1000人の聴衆の前で15人の歌手が1曲だけアリアを歌うのです。8月のザルツブルク音楽祭、ヴェルディ《シチリア島の夕べの祈り》は来年に延期になってしまいました。これはウィーンのレオンカヴァッロ《道化師》でプラシド・ドミンゴと共演したとき、ドミンゴがザルツブルク音楽祭に推してくれたのでした。（写真参照）フィレンツェ歌劇場ではヴェルディ《ナブッコ》を歌ったあとの12月、延期されたオテロ（ヴェルディ《オテロ》）デビューがようやく実現します」

オテロは特別な役

「オテロは僕にとっても特別な役で、声と共に人間的にも熟すのをずっと待っていました。僕のオテロはマリオ・デル・モナコのようなアプローチではありません。彼のような強靭な声を持っていないからです。それに、以前は彼のような歌いかたが主流だったかもしれませんが、いまはあまり使われていないようです。ドミンゴの、楽譜に書かれた強弱や色に忠実なオテロが好きで、そのようなアプローチになります。第1幕の二重唱では弱音記号 *p* が6つもついていたりして、さまざまな色を要求される役なのです。怒っている場面でも決して怒鳴らせるだけではなく、ほかの役にはないことを要求されます。苦労して勉強しましたが、それを通して強弱の使い分けかたを学びました。基本的にはベルカントにのっとって、ときどきドラマティックに書かれている役と言えるでしょう。オテロは戦士で、強い人間ですが、品格も忘れてはなりません。来年2月にはダラスでも演奏会形式で歌い、9月にはウィーンでの《オテロ》も待っています。オテロは『1年に1、2プロダクション』というスタンスで長く歌っていきたいです」



プラシド・ドミンゴ（左端）、ダニエル・バレンボイム（右端）とともに

無理をせず、1日でも長く

「声の健康を保って、無理をせず、1日でも長く歌い続けることです。そのために、僕は年間で40回強しか公演を入れず、本番のあとは必ず2日間の休息を取ります。アルフレード・クラウスもルチアーノ・パヴァロッティもしていたことです。レパートリーの選択も、エージェントとの戦いです（笑）。Sul fiato（息に声を乗せる歌唱技術）を追求し続け、いまでは《トロヴァトーレ》、《アイーダ》など、ヴェルディ歌いとして認めてもらえるまでに成長できました。それからたとえば、昨年はメトロポリタン歌劇場でプッチーニ《外套》でデビューする予定でしたが、あの劇場はリハーサルもほとんどなしで本番に臨まなければならないため、出発する直前まで悩みましたが、声の健康を考えて、同僚に代わってもらいました。いまは3カ月間、細部まで勉強を重ねたオテロを満足できるように歌うのが夢です！」（談）